

富山の最新ニュース

webun

北日本新聞



滑川市早月加積地区／清流の里めぐり 2014年8月12日

1. チューリップ生産



■“全国区”の春の風景

劔岳に源を発する清流・早月川に沿って、海岸まで南北に広がる滑川市早月加積地区。

豊富な水を生かして農業が盛んな一方、企業進出も多く、市内随一の工業地帯でもある。

歴史をひもとけば、あつい信仰心に支えられた伝説が残る。この夏、清流の里を歩いた。

暑さに負けないほど熱く、わくわくさせられる人たちの営みがあった。(滑川支局長・

小林大介)

目の覚めるような赤い花々が風に揺れる。その向こうに列車が現れ、赤と白の観覧車

の下を走り抜けていく。

1枚の絵のような風景だった。今春、滑川市中村で出会ったチューリップ畑は、ちょっと忘れられない。

「きれいやったやろ？ 毎年、春はこの辺にカメラマンが大勢来る。大阪とか京都とか、それこそ全国から」

7月上旬、海に近い滑川市中村の倉庫で黒川孝征（たかゆき）さん（72）が話す。日焼けした顔がほころんでいる。

黒川さんは中村のチューリップ生産者。市花卉（かき）球根組合の組合長だ。球根を出荷するため選別しているところに、無理を言ってお邪魔した。

4月、園児を招いたチューリップの花の摘み取り体験があると聞き、取材した中村の花畑にいたのが黒川さんだった。そこで絵のような風景を教えてくれた。JR北陸線と富山地鉄本線に近く、色鮮やかな花畑と、列車、ミラージュランド（魚津市三ヶ）の観覧車の“競演”を楽しむことができた。

逆に列車側からは、花畑の背後に立山連峰が見える、とも教わった。かつて「週刊文春」で、「車窓から眺める花のある風景」の全国第1位として取り上げられたそうだ。

“全国区”の春の風景。その陰には苦労もある。

「カメラマンに『きれいな花に囲まれていいねえ』なんて簡単に言われると、とんでもない、って。必死やから」

父の後を継いで55年。妻の敏子さん（68）と二人三脚で生産を続けてきた。県内唯一という珍しい「バーガンデレス」など10品種を栽培しているが、かつてほどの収入はない。体力も落ちてきた。

20年前に25人いた市内の生産者は高齢化や後継者不足で減り、現在は早月加積地区の3人だけ。黒川さんと仲間の石坂勇さん（66）＝中村、梅次勲さん（72）＝大窪＝が計約25アールで生産し、約50万球の球根を出荷している。

最近の楽しみは、地元園児を招く花の摘み取り体験だ。

「自慢の眺めをなくしたくないし、子どもの笑顔が見たいし。まだまだやめられん」

来年の春がいまから待ち遠しくなった。

■遠望近信 小善真司さん（47）横浜市、復興庁参事官

子どものころ、家の周りは田んぼばかりでした。公園のような遊び場もなく、稲刈り後の田んぼで友達とよく三角ベースをしたものです。勉強しろとうるさく言われることもなく、ストレスのない豊かな時代でしたね。いまは工場が並び、経済が発展しています。東日本大震災の被災地復興でもそれは重要なことで、働く場所がないと人は戻ってきません。

最近では年1回、5月に妻子を連れて帰省するぐらいですが、老後は実家の農業を継ぐのもいいかなあ、と。農家の長男ですから。（大掛出身）

